
永遠のメリーゴーランド（ミコと芦田さんの場合）

alice

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠のメリーゴーランド（ミコと芦田さんの場合）

【Nコード】

N3380Z

【作者名】

alice

【あらすじ】

凧ちゃんが女の子として生活を始めてはじめてできた友達ミコちゃん、そしてそんな彼女と芦田さんのお話です。

凧ちゃんを女の子の輪の中に入れるきっかけを作るつもりだった彼女ですが、いつのまにかミコにとって凧ちゃんは一生の大親友に。

第一話 友達になるつヨ!

それは中学2年生の夏休みも半ばを過ぎようとした頃だった。

「美子^{みこ}ー、安藤^{あんどう}さんから電話ー!」

その日

アタシが部屋で夏休みの宿題をしていると、ドアの向こうで兄の茂が声をかけてきた。

「ウン、こつちにまわしてー。」

アタシは兄に電話を部屋の子機にまわしてもらおうようお願いすると、ほどなくその子機がプルルル・・・と音を立てた。

「ハイ、アタシです。」

「あ、ミコ?」

「久美子ー、ひさしーネ。元気でやってる?」

アタシは藤本 美子、友達からは美をミと読んでミコと呼ばれることが多い。

そして今電話をかけてきたのは安藤^{あんどう} 久美子^{くみこ}といって、アタシが中1のときとても仲の良かった女の子の一人だ。

「じつはさあ、ミコにちょっとお願いがあるんだわあー。これからアンタんちに行ってもいいかな?」

いつもは小さいことをあまり気にしない久美子があるときはやけに真剣そうな口調だった。

「あ、ウン。いいヨ。アタシんちでいいの？どっかで待合わせしてもいいけど？」

「ウウン。アンタんちのほうが都合がいいから。じゃあ、30分くらいでそっちに行くから。」

そう言っつて久美子からの電話は切れた。

そして30分後

ほとんど正確に久美子はアタシんちを訪れてくる。

「ミコ、ひさしぶりー。新しいクラスはもう慣れた？」

「ウン。まあ、1年のとき一緒だった久保ちゃんも奈央も一緒だしさあ。あと、ほら、同じクラスだった井川さんも一緒なんだヨ。」

「あ、そうなんだあー。アタシ、井川さんってほとんど話したことなかったけど、あの娘ってミコとツートップのすっごい秀才だったもんネ？」

「アハハ。アタシのほうが下だヨー。あの人って将来医者をめざしてるらしいから、やっぱ頭いいわ。」

そんな挨拶から始まって久美子は途中で買ってきたらしい缶ジュースを1本アタシに渡してお菓子の袋を開いた。

「あ、サンキューー！」

アタシはプシュッと缶ジュースのプルトップを開け、そして一口喉を潤す。

「で？ さっき電話でなんか深刻そうな感じだったけど、アタシに頼みっつて言っつてたよネ？」

「ウン。じつはミコだから頼めることなただけだね…。」
「まあ、とにかく言ってみてヨ？ 久美子の頼みだったらなんとかしてあげたいって思うし。」

「じつはさあ…。 ミコのクラスに小谷 哲君っているでしょ？」

「ああ、ウン。いるネエ。なんか女の子みたくキレイな顔した人でしょう？ 今アタシの席の隣に座ってるヨ。」

「ウン、そうそう。あの子ってアタシの幼稚園からの幼馴染なんだから。」

「あ、そうなんだあー。それで、その子がどうしたの？ もしかしてアタシに愛のキューピット役でもお願いしたいとか？（笑）」
「そんなんじゃないわヨ。 アタシってそういう趣味ないし。」
「そういう趣味ってどんな趣味ヨ？（笑） アンタって前から中性的なビジュアル系のバンドとか大好きできゃあきゃあ言ってたじゃん？」

「ウン、そういう中性ビジュアル系ならいいけどね、あの子の場合は本物だから…。」

「本物ってなにが？」

すると久美子はアタシの前にずっと顔を近づけてきた。

「ミコ、とにかく驚かないでアタシの話をよく聞いてネ？」

「い、いいヨ…。 どうしたの？ そんな緊迫した顔しちゃって。」

「じつはさ、小谷君ね、あの子…じつは本物の女の子なんだわ。」

「ハアアアーーーーー!？」

ミコはとぼけたような声を上げてさらにこう続けた。

「なんか言ってることがよくわかんないけど、女の子っぽいのは同

感だけど、女の子そのものってこと？」

「ウン、そういうこと。」

「あ、もしかして、よく聞く性同一性なんかかっていう？ 身体が男だけど心が女って言ってるひとたちのこと？」

「ウン、そういうんじゃないヨ。ホントの女の子ってこと。アタシたちと同じ。」

そして久美子は小谷君が1週間ほど前の夜中に急な腹痛で病院に運ばれたこと、それは女性の生理であり、検査の結果彼の身体には子宮があつて染色体も女性のXXであつたことがわかつたということなどをアタシに話した。

「エ、つてことは、つまり小谷君は今まで男の子として育てられてきたけど、それは間違いでじつは女の子だつたってこと？」

「まあ、ストレートに言えばそういうことだネ。」

「びつくりしたあー！へえー、そういうことつてあるんだネエ。」

まあ、でもそう言われてみればたしかにあの人の雰囲気つて異性つていうより同性っぽい感じするしねー。」

「ウン。アタシも彼は幼稚園からずっと知つてたしね。 哲ちゃんつて話し方も態度もちゃんと男の子なんだけど、どっか女の子のオラみたいのをずっと感じたんだよね。」

「そっかあ。じゃあ、小谷君は女の子として生活するようになるわけ？」

「ウン。そういうことで決めたらしいヨ。」

「でもさあ、学校とかがつてどうするの？ まさか今の学校にそのまま通い続けるつてわけにはいかないでしょ？」

「ウン。哲ちゃんは今の学校に通つて卒業したいって。」

「エエエーッ！ でもそれじゃ周りの人たちきつとすごい驚くんじゃない？」

「だろうネ。 それでさ、 ミコにお願いがあるんだ。」

「なにヨ？」

「彼…っていうか彼女の友達になってやってくれないかなあ？」

「エーッ！ アタシが？」

「ウン。 ダメ？」

「ダメ…っていうんじゃないけど…。」

「もしアタシが同じクラスだったら良かったんだけどさ。 でも哲ちゃんと同じクラスでこんなこと頼めるのってミコしかないんだヨ
ー。」

久美子はウルウルとした目でアタシのことを見る。

（ウン…、 たしかにあの人って嫌な人とはぜんぜん思わないけど、アタシって、 席が隣なのにほとんど話とかしたことってなかったよなあ…。）

でもこんなに真剣な久美子って今までほとんど見たことなかった。

中1のときはアタシらって冗談ばかり言い合って、 気を使わないで付き合ってきたし。

まあ、アタシが友達になって、 それから女同士の輪みたいのに入れてやれば…。

「ウン。 わかった！ じゃあ、アタシ、彼、 じゃなかった彼女の友達になってみるヨ。」

そしてアタシは久美子にそう返事をしたのだった。

第二話 きっかけ

夏休みが終わって数日後

いよいよ今日小谷君、あ、違った！小谷さんが女の子として登校してくる。

クラスはそのこととにかくざわついていた。

どちらかというと、女の子は意外と冷静にその事実を受け止め始めている様子。

しかし男の子たちは今まで彼女を『哲ちゃん』と呼び一緒に遊んできたわけで、どこか割り切れていない雰囲気を感じる。

とくに彼女と仲が良かった安田君や工藤君なんかは朝からずっと落ち着かない雰囲気だった。

朝のHR開始時間になってもまだ担任の山岸先生は教室に現れない。そして5分ほど遅れてガラツと教室の扉が開き山岸先生は入ってきた。

教室の中はシーンと静まり返る。

先生の隣にいるのはアタシたちと同じ女子の制服を身に付け、ショートボブの髪形をして目のクリツとした可愛らしい感じの女の子。彼女は下を向いて顔を真っ赤にし、スカートから覗く細く白い足は小刻みに震えていた。

先生はクルツと黒板の方に向きを変え白いチョークを摘んで大きな字で『小谷 凜』と書き

「これが新しい小谷さんの名前です。『りん』さんと読みます。」
と言い、そしてアタシたちに今までの経緯を簡単に説明した。

「小谷さんは生物学的に本当は女性です。みんなにはこのことを理解してほしいの。」

最後に先生がそう言ったとき、クラス委員の井川さんがスツと立ち上がって

「小谷さん、席に座ろう?」

と声をかける。

そして、小谷さんはその言葉にホツとしたような表情を浮かべてアタシの隣にある自分の席に腰を下ろした。

それから、そのまま1時間目の山岸先生の英語の授業が始まる。
授業中アタシはフツと彼女の横顔に目をやった。

紺のジャンパースカートの上に着たボレロから見える肩は小さくて
優しい曲線を描き

少し茶色っぽい亜麻色の髪の毛

ふっくらしたピンク色の頬とプクンとして柔らかそうな小さ目の唇。
つるんとした形の良いおでこ。

そして女の子らしい優しい目元。

きっと基本的には夏休み前に小谷君だったときの身体なんだろうけど、こうして女の子として意識してしまうともう男の子として生活していたときの面影はあまり感じないように思える。

(なんか、すごく可愛いんですけど…。)

それにしても、こうして今まで男の子だって思っていた人がある日突然女の子の制服を着て自分の隣に座っているのはすごく不思議な感覚だった。

みんなが座っている席を前から見ていくと女子の列の隣に男子の列、そしてその隣はまた女子の列というようになっていて、だから横列は男と女が必ず隣り合わせて座っている。

その中で男子の一行に紅一点で座っている彼女の姿はやっぱり違和感を感じてしまう。

英語の授業が終了2時間目の社会の授業が始まるまでの10分休み

アタシは隣に座る彼女に意を決してこう話しかけた。

「ね、『凜』でいいよね？」

彼女はアタシに

「うん、もちろん！」

と言ってニコッと微笑む。

(わあ、ホント可愛いやあー！)

アタシの差し出した手を握り返してくれた。

そして、白くてとても柔らかい彼女の手を握ったとき、アタシは心の中で何かビビッとくるものを感じてしまったのだった。

しばらくの間、彼女は女の子の言葉遣いにまだ戸惑っている様子だった。

簡単などころでは主語の「アタシ」か「わたし」。

注意しててもときどきは「ボク」という単語がでてきてしまう。

ただアタシは

「そんなに意識しすぎてもしようがないヨ。」

と凧にアドバイスしたりした。

「まあオレはさすがにまずいけど、女の子でボクってけっこう可愛かったりするじゃん（笑）女の子たちの中にいればきっとそのう無意識で女言葉になっちゃうんじゃないかな。」

凧はそんなアタシのアドバイスを謙虚に受け入れていたようだった。

女の子として学校に通学を始めて半月ほどが経ち、身体の状態も安定してきたことから彼女も体育の授業に参加するようになった。後で凧に聞いたことだけど、これは初め学校にとっても彼女自身にとっても少し心配をしていた点だったらしい。

体育の授業は体操着でやるわけで、当然男女別々に分かれてそのための着替えをすることになる。

今まで男子として意識していた人が女の子として混ざって同じ部屋で着替えをする。

そのときの周りの女子の反応、そして凧自身の気持も最初は少し複雑なものがあつたような気がする。

それでもアタシの周りの女の子たちに、凧に対して意識して自分の身体を隠そうとする娘はいなかったように思う。どちらかというと凧のほうが、恥かしがって隠してしまう。

「女同士なんだから別に見たってかまわないヨ。」
アタシは凧にこんなことを言った。

すると彼女は意外にも他の娘たちの裸を見ることに大した気持はない。逆に自分の身体を見られるほうが恥ずかしいということをやっていた。

それでも彼女はそのうち彼女自身そういう感情をあまり意識しなくなっていた。

それは彼女に3回目の生理がきたころからだっただけらしい。

アタシは、それはやっぱりアタシたちと彼女との間の絶対的な共通点である女性の生理という存在が、彼女にとって自分が同じ女性であるということを否応なく意識させてしまうのだろって思った。

2年生の終わりごろ

男女に分かれて「心と身体の教育」というのが行われたことがあった。

当然凜もあたしたち女子の中に混ざって話を聞いていた。

その授業の講師として来たのは、大正大学産婦人科の女医の先生。その先生はアタシたちにこんな話をしてくれた。

「もし世の中が男性だけでもしくは女性だけで子孫を残せるとしたらどうなっていたと思いますか？」

この問に対する女の子たちの反応はそれぞれだったが

「同じ女だけだったら戦争とかなくてきつとすごく繁栄した世の中だったんじゃないかって思います。」

という答えが何人かいた。

それに対しその先生はこう言った。

「もしかしたら、そうかもしれないわネ。でもアタシは多分人間

は成長する前に滅んでいたんじゃないかって思うの。なぜかっていうと、価値観が同じであることは成長を生み出す刺激がないから。人間ってというのは考えながら、悩みながら成長していくものだから。男と女はやっぱり根底にある価値観が違う。だからお互い理解し合おうとする。そしてその理解し合おうとする気持が愛じゃないかってアタシは思うの。だからアナタたち女の子には、男の子という存在を遠ざけようとするんじゃないかと理解しようとする努力を是非して欲しいと思います。」

その先生は男性と女性の価値観の違いを積極的に認めること、そしてそれを理解する努力をアタシたちに話してくれた。

そのときフツと横にいる凜の表情を見ると彼女はとても真剣そうな顔でその先生の話聞いていた。

それはきつと、ある日突然価値観の変更を迫られた彼女にとってこれから先の人生を歩いていくために一番大切なことだって思ったのかも知れない。

女の子の付き合いは気の合ったグループ単位で行動することが多い。アタシは、クラスの中で久保ちゃんや奈央といった1年のとき仲が良かった娘たちと2年になってもそのままグループを作っていた。そしてそこに凜が混ざった。

最初はわりと遠慮がちだった彼女は次第に自分からも積極的にアタシたちに話題を振ってくるようになった。それは彼女が女の子のことを無理に勉強してきたものではなく、どちらかっていうと男女の枠を超えて素直に感じたものを表現しているように思えた。このときアタシは久美子に頼まれたからではなく、一人の人間としての凜に興味を持ったような気がする。

アタシは凜の考えることというのは、すごくピュアで透明感のあるように思えた。

そう、彼女は人間としてすごく純粹でまっすぐな気持を持っているように感じた。

そして彼女と話しているとアタシ自身がとても心地よくなれてしまふ。

次第にお互い話をしていなくても、たとえ別々のことをしていたとしても、自分の横に彼女がいることがアタシにとって嬉しいような気持になっていった。

だからアタシは自然と凜と一緒にいる時間が増えていった。

第三話

中3になりアタシと凜はさらに仲が良くなっていく。

それまで同じグループで仲が良かった久保ちゃんや奈央も含めて日頃は行動していたけど、アタシはそのうち休みの日も凜と一緒に時間を過すことが多くなった。

今年はいよいよ受験生、そのため日曜日には一緒に図書館で勉強をして帰りにはお気に入りのおクレープ屋さんで2人で生クリームたっぷりのクレープを頬張っておしゃべりに花を咲かせる。

そして3年生になって少し経った頃、凜にとって運命的な一人の男の子が現れる。

彼は石川 渉君という名前に関西から転校してきた子だった。

そして凜は次第にこの男の子に心を惹かれていく。

彼は女心をくすぐるような、どこか少年っぽさを残した男の子だった。

一見すると暖簾に腕押しのようなひょうひょうとした性格で、まっすぐな凜の性格を上手く操ってしまう。だから凜も彼に対してどう対応したらいいのか、最初は戸惑っている気持があったらしい。

そしてこのワタル君と凜の心は3年生のある日みんなで行ったディズニールランドでお互い重なり合っていく。

凜は女性として生活をするようになって、それまで異性であったはずの女の子を同性として意識するよう努力してきた。

しかしワタル君を異性である意識するようになるのにはそういう

努力をする必要はなかったみたいだった。きっと凧はそのとき本能的に自分の中の女性を受け入れていったんだと思う。そして2人は自然に惹かれあっていった。

3年生の夏休みが終りに近づく頃

凧とワタル君は初めて2人きりの初デートをすることになった。

場所は都内のプール

凧はこのとき初めて女の子としての水着デビューを果たすことになった。

ただ彼女はこの水着デビューをするにあたっては最初自分なりに計画があるらしかった。

初めに女の子同士でその後慣れてきたら男の子も混ぜて、なんてことを彼女は考えていたらしい。

ところがこのワタル君とのプールデートの約束でそうしたホップ・ステップを通り越していつきに最大加速のジャンプをすることになってしまった。

そしてそのデートの日の数日前

彼女はアタシに電話をかけてきて、アタシはこんな相談を受けた。

「ねえ、ミコオ。アタシさあ、水着なんか着てもヘンじゃないかなあ？」

「ヘンって？　なんか凧の言ってることの意味がよくわかんないけど。」

彼女は少し躊躇ってこう言った。

「だからさあ、似合わないっていうか…。」

「ウーン、似合うか似合わないかっていうのは人それぞれの感じ方があるからよくわかんないけど、でもさあ。」

「でも？」

「男の子ってさ、女の子の水着姿とか見たらやっぱりどうしてもエッチな想像とかしちゃうじゃん？」

「まあ…だろうネ。」

「だから石川君も凜の水着姿見たらきつとそういうのは想像しちゃうんじゃないかな。」

「エ、そうなのかなあ？」

「アタシはそう思うヨ。だって、それは彼は男で凜は女なんだもん。アンタはそういうところで自信をちゃんと持ったほうがいいヨ。」

それにせっかく水着姿になって男の子に何も意識されないんじゃないかな寂しいじゃん。」

「そうだねー。」

そして結局アタシは凜の水着選びに付き合うことになった。

この頃では体育の着替えのときなどお互い何の意識もなく裸を見合っていたけど、可愛い水着を身に付けた凜の身体は思ってたよりもずっと女性らしい体型になっていた。

彼女は3年生になった頃には生理の時期も安定し、そしてそれまで多少中性的な体つきもこの時期から急に女性らしく柔らかな丸みを帯びていく。

中3の初めにはブラジャーもつけるようになり、腰のラインもくびれと丸みがハッキリしてきた。

そんな身体の急激な変化に彼女自身も少し戸惑いを感じているようではあったけど、そうした身体の変化は心の変化にも少しずつ影響を与えていったように見える。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3380z/>

永遠のメリーゴーランド（ミコと芦田さんの場合）

2011年12月11日21時59分発行